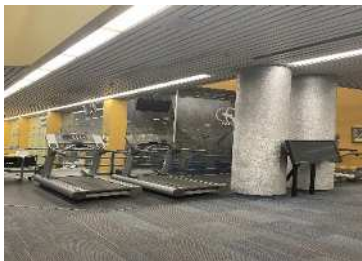
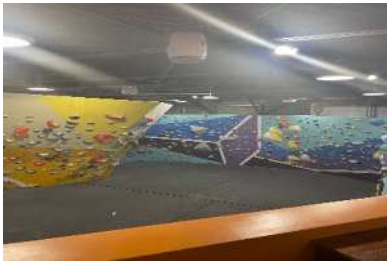


参加した コース	ふじのくに地域探求コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)			訪問国	アメリカ合衆国 ロサンゼルス
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	澤田優菜		学年 2年

1. 探究活動の概要

- 1. 留学地域 アメリカ合衆国ロサンゼルス
- 2. 受け入れ先機関名 カプラン・インターナショナル・ランゲージウエストウッド校
- 3. 留学期間 2024/8/5～2024/8/23
- 4. 探求活動の問い

静岡の特徴に合ったスポーツ医療の形を模索することで、それらを幅広い世代に応用させるためには誰が何をしたらいいのか考える



5. 探究活動の成果

留学前にはアメリカで盛んなスポーツやジムに関する調査や国内で身近にスポーツをしている人へのインタビューなどを行った。これらを通じて分かったことをもとに、「アメリカはスポーツも医療も発展しており、相互の関係性が良いためスポーツが盛んである」というおおまかな仮説を立てて留学に臨んだ。

留学中は主に「インタビュー」、「スポーツ観戦」、「ジム体験」の三つを行った。

インタビューは主に語学学校の生徒を対象に行った。スポーツ医療という言葉の知名度や自分の国のスポーツサポートの体制について話を聞いた中で予想外だったのが、ロサンゼルス市民の意見だった。インタビューを行う前までは、医療が発展しているから安心してスポーツができるのだと考えていたが、病気や怪我をして病院にかかるとお金がかかってしまうからという理由でスポーツをせざるを得ない人もいたようだった。また、アスリートにお話を伺える機会があったが、アスリートにはやはり多方面でサポートがなされているようだった。予防的な面でも、自分の能力を知るという面でもスポーツサポートがなされていると知り、医療を本格的に利用するとなるとやはり違うなあと感じた。アメリカは小さい福祉の国であるのに対し、日本は大きい福祉の国であり、アメリカに比べて同じ値段でできることの幅が違うので、日本の体制にあったスポーツサポートの形を提案していきたいと思った。

スポーツ観戦では、野球チームであるドジャースの試合を2回観戦しに行った。1度目に行った平日は地元の人が多く、お酒の販売もあったのでアットホームな印象が強かった。2度目に行った休日は外国人が多く、観光地感が出ていたことに驚いた。また、球場には英語以外の言語での表記も多く、観光資源としての役割も果たしているのだと感じた。スポーツ観戦を通じて、アメリカのスポーツの商業化を肌で感じられた。

ジム体験では、語学学校から徒歩で3分ほどのところにあるジムに行った。そこはクライミングと通常の器具がどちらもできる場所で、初心者も経験者も楽しめる工夫がなされていた。また、かなり都会の真ん中であったにも関わらず日本ではあまり見ない形態のジムが普通にあることが衝撃的だった。自分に合ったスポーツを手軽に見つけやすいのは大きな魅力だと考えた。

アメリカはスポーツが盛んな国であるが、日本とはスポーツをやる目的も形態も大きく違うことがわかった。また、日本では学校の体育の授業や学生時代の部活動などである程度の運動習慣がついていることも多いが、アメリカでは自分から始めない限りあまりそういう機会がないことも明らかになった。静岡にはプロのチームが、サッカーにバスケにバレーボールと充実しているので、もっと商業的な価値を高めてより多くの人にスポーツを大人になっても続けたいと思ってもらえるようになるのではないかと考えた。また、企業と医療機関が連携することで、安い値段で手軽にスポーツサポートを行えるようになると思った。

2. 留学を通じて

留学中に痛いほど学んだことが、ウジウジしていたら伝わるものも伝わらないということだ。私はホームステイだったが、初めの三日間ほどは英語に慣れておらず緊張していたこともあり、ホストファミリーともうまくコミュニケーションをとることができなかった。しかしそれではもったいないと思い、相手のことを思いやりながら話しかけることで、周りの人々の優しさに気づくことができた。これをきっかけにして、ホームシックも乗り越えることができたので本当に人の力は偉大だと思う。周りに頼らず、自立しようとか自分だけで行動することも大切だが、それ以上に周りの人とのつながりも大事にしていきたいと感じた。

私にとって留学とは、言語の幅、考える幅、価値観の幅が広がることだった。何をするにも周りの人がいないと成り立たないし、自分が何より変わらないと成長はない。留学はあくまで手段だ。自分をどれだけ成長させられるかは自分にかかっているし、周りの環境にもかかっている。他の人への感謝を忘れずに変わろうと努力する環境をもらえることが何よりの価値だと思う。留学はあまりに短く、そしてとても濃かった。自分の中で指針として作ることができたものを一生忘れずにいられるよう、これからも頑張っていこうと思う。

